2021年9月18日開催

CPASセミナー
「グローバル化する反米――遠藤泰生編『反米　共生の代償か、闘争の胎動か』（東京大学出版会、2021年）をめぐって」参加記

2021年9月18日に開催された本セミナーは、『反米　共生の代償か、闘争の胎動か』（以下、本書）の合評会の形をとっている。しかし編者の遠藤泰生氏によれば、企画から15年の時をへて刊行された本書は、過去に東京大学を中心に行われてきた科研プロジェクトやシンポジウムでの議論に連なるものだという。刊行までの時の経過は、反米をめぐる人々の情動の複雑な絡み合いなどの動態をやや見えにくくした一方、反米のパターンや構造を浮き彫りにする上で有益であったと遠藤氏は語った。

続いて、酒井啓子氏（千葉大学）、逆井聡人氏（東京大学）、古矢旬氏（北海道大学・東京大学）がコメントを行った。酒井氏は、本書では触れられていない中東地域からみた反米と、各章で論じられた反米の諸要素との共通点として1)大国だからこその反米、2)オリエンタリズムや外国支配への抵抗としての反米、3)反米の背景にある精神論と物質文明、を挙げる。

序章で編者は「アメリカが大国であるということ自体に反米に耳を傾けられない構造が最初から埋め込まれているのだろうか」(21)と問う。酒井氏は1)について、大国としての慢心ゆえの他国への無理解から、アメリカはときに中東諸国の動向を見誤り、中東ではアメリカの圧倒的な暴力・技術力への脅威が反米テロリストの増加を招いてきたと説明する。2)に関して、例えばアメリカ大衆文化でのキューバ人の戯画化(本書第2章)と同様の例は、アラブ人に対してはより露骨に、テロリストと結びつける形で行われてきた。また中国のナショナリズム形成の手段としての反米(同第3章)と類似する事例として、中東では反米政権が国民の反米感情を煽り、国内動員に用いてきた。また本書で多くの章が論じる3)は、イスラーム文明への誇りや、欧米礼賛への反動と接続しているという。

最後に酒井氏は冷戦末期から9.11後にかけて発表された論考を事例に、アメリカの論客が中東側のアメリカへの誤解や無理解に反米の要因を見出してきたことを指摘する。アメリカ側のこうした論理は、反米の構造としてアメリカ側の他国への無理解を指摘する本書とは対照的である。21世紀の現在、中東の反米は「脱米」へと変化したものの、これまでのアメリカの中東政策への疑念と不信は残っているという。中東における反米を検討するには、冷戦構造下のアメリカが抱えてきた二重性――民主主義の旗手を標榜しながらもイギリスの植民地支配を継承する姿勢――を見直す必要があると述べた。

ところで本書終章で編者は、2018年にDA PUMPの楽曲『U.S.A.』がヒットしたことへの「戸惑い」(304)を打ち明ける。しかし逆井氏は、この曲にふんだんに盛り込まれた「親米」の多義性を、1990年代後半から2000年代の大衆文化におけるパラダイム・シフトと

重ねて指摘した。沖縄出身のISSAを中心としたDA PUMPの最初のヒットは、1990年代後半から2000年代初頭の「沖縄ブーム」のさなかであった。1990年代初頭から安室奈美恵やSPEEDら沖縄出身の歌手のデビューが続き、沖縄サミット(2000年)、連続テレビ小説『ちゅらさん』(2001年)など、沖縄への注目が集まった。他方、1995年には米兵少女暴行事件が発生し、日米地位協定見直しを求める沖縄県民総決起大会が開かれた。戦後50年を迎え、学術界でも、日本の植民地主義がもたらした被害の記憶を掘りおこす動きがみられた。ところが2000年代を代表する宇多田ヒカルの登場は、日本の大衆文化における沖縄ブームから日米文化融合路線への転換点であったという。2002年にジョージ・W・ブッシュ大統領（当時）来日を歓迎する式典に彼女が招かれたことは、その象徴たる出来事であった。以降、1990年代には率直に語ることがためらわれた「親米」が、露骨に前に出はじめた。逆井氏は、その露骨さが2000年代の文化においてはある種の「不気味さ」を伴って阿部和重や浦沢直樹の作品に表出しているとし、「不気味さ」の正体を「アメリカを想う」こと自体が一定の距離感をもって語られるようになった点にみる。『U.S.A.』の親米イメージもまた、1990年代に一度問い直され、いまふたたび不気味にたちあらわれたものである。しかしそこには、親米を新鮮に感じ面白がったり、懐かしさを覚えたり、あるいは唖然としたりと、大衆の世代や属性により多様に受けとめられる「親米」があるという。

21世紀の「不気味な」親米表象から反米の位相を逆照射する逆井氏とは対照的に、19世紀から今日に至る反米の系譜をたどりながら、その多層性を指摘したのが古矢旬氏である。古矢氏は本書の議論を、反米の歴史的展開を通じて地層のように積み重ねられてきた5つの視角から論じる。本書にフランスや中東の視点がないことを重大な欠点としつつも、歴史的に積み重ねられてきた反米の「地層」を各章が様々な角度から検証し、まとまりをもって構成されていると評価した。

反米の起源としての1)「ヨーロッパからみた「辺境」アメリカ」への反感は空虚さや巨大さ、無歴史性と結び付けられてきたが、それは同時に19世紀アメリカの自画像にも投影されてきた。アメリカの近代社会の発展とともに、無歴史性や巨大さはそのまま2)「近代の新たな物質文明・文化のもつ脅威や破壊性の象徴としてのアメリカ」のイメージに転換する。その興味深い一例として古矢氏は、キューバの独立運動家マルティ（本書第6章）と、ロシアの詩人エセーニン(同第8章)が、ともにニューヨークのブルックリン橋にアメリカ的近代性を見出していた点を挙げる。そして19世紀後半以降、植民地主義の批判者であったはずのアメリカが軍事的介入や領土拡張によって3)「帝国・アメリカ」へ変貌したことによる反発と抵抗が生じる。特にラテンアメリカにとって、ヨーロッパ帝国主義支配からの解放と同時に新たな支配の入り口となったアメリカは、ヨーロッパとは違う意味で両義性をもっていた。また冷戦期には、E.H.カーの経験(同第3章)に示されるように、グローバル化するアメリカ型資本主義への批判や社会主義が4)「「非米」的イデオロギー」として抑圧され、資本主義陣営での学術的発展が阻害された。これら反米の史的展開を整理したうえで最後に古矢氏は、世界でアメリカの存在が希薄化・相対化される5)「ポスト・アメリカ」的状況では、大衆文化にとどまらず、アメリカが掲げてきた民主主義や個人主義に基づく文明観も相対化されていると指摘する。

コメントに続き、執筆者の西崎文子氏(第1章)、金志映氏(第4章)、竹村文彦氏(第6章)、菅原克也氏(第7章)、安岡治子氏(第8章)から、担当章に関して執筆の経緯や本書全体に

おける位置づけが語られた。フロアからの質疑では、学生や若手研究者を中心に、本書が課題として残した21世紀における「反米」のゆくえを問う声が挙がった。遠藤氏と逆井氏は、今後実体としてのアメリカの存在感が薄れたとしても「センチメントとしての反米」は残存するのではないかと述べた。またある参加者は、近年のアメリカの歴史学界にグローバル・ヒストリーを重視する傾向がある一方で「反米」を扱うことが困難である現状に触れ、反米をグローバルな現象として描くことと、アメリカ史をグローバルに描くことは接続しうるのかを登壇者に問うた。様々な学問領域で、ナショナルな枠組を越えた視座が求められている。しかし古矢氏と遠藤氏は、アメリカの国際社会への影響力を「反米」も踏まえて複層的に検証するならば、研究対象をグローバルに広げるだけでなく、アメリカ研究がこれまで内包していた価値観そのものを疑うことも必要ではないかと述べた。歴史学や地域研究の学問的訓練を今まさに受けている学生の立場からすれば、これは途方もない課題のようにも見える。しかし取り組む意義があることは間違いない。

（尾　﨑　永　奈　Boston University・東京大学（院））